

書評

Frédéric Neyrat

LE COMMUNISME EXISTENTIEL DE JEAN-LUC NANCY

Paris, Éditions Lignes, 2013, 96 頁

安藤 歴*

Reki ANDO

1. はじめに

本書は哲学者のフレデリック・ネイラ（1968～）がジャン＝リュック・ナンシーの「実存主義的コミュニズム」（*le communism existentiel*）について論じたものであり、彼の政治的生態学についての基礎的な見解をナンシーから抽出するものである。著者のフレデリック・ネイラはウィスコンシン・マドソン大学の比較文学講座に訪問研究員として属しているほか、マルチチュード誌、リーニュ誌等の編集委員を行っている。また、国際哲学コレージュのプログラムディレクターを務めた経験もある。彼の議論は“*Atopies. Manifeste pour la philosophie*”（2014）、“*La Part inconstructible de la Terre. Critique du géo-constructivisme*”（2016）など他の著作により詳細に展開されている⁽¹⁾。

ジャン＝リュック・ナンシー（1940～）はドイツ哲学の研究を背景にデリダの脱構築にも強い影響を受け思索を進め、現在のフランス哲学において重要な位置を占める哲学者である。本書でネイラが目指すのは、ナンシーが脱構築を引き継ぎつつ、「存在論」と「政治」の関係について新たに思考し直そうとしていることである。形而上学（存在論）やそれと結びついた政治思想は脱構築を経て徹底的に批判されてきたが、その上で「存在論」と「政治」はいかに可能であるのか、そこでは何が問われるべきなのか。ネイラはこの問へのナンシーの議論を「実存主義的コミュニズム」として論じていく。

本書の流れを確認しよう。ネイラはナンシーの思考の特徴や変遷を12の標題のもとにまとめている。ここでは、(1) 存在論の再考察、(2) 民主主義的政治の可能性、が論じられる。以下ではこの2点について見ていこう。

*大阪大学大学院 人間科学研究科 共生の人間学 博士前期課程 (rekisinoreki1126@gmail.com)

2. 存在論の再考察

ナンシーの存在論の特徴 (pp.9-20)

ナンシーが存在論の出発点にするのは外部性である。だが、隔たった外部を起点に思考を始めることは、神学が想定する神のような超越から思考することではない。彼が問題にするのは、隔たり (*un écart*) である。隔たりとは、存在者や世界がその外部と取り結ばざるをえないような関係性のことを指す。ナンシーにとって、人間存在に限らずあらゆる存在者が世界内存在であることが外部性を伴うのである。この内にあることの外部性という関係から実存を思考するあり方を指して、ネイラは「根源化された実存主義」(*un existentialisme radicalisé*)、「留保なき実存主義」などと呼ぶ。このことは次に共存在の分析と関わらせて見ていくことになる。

西欧形而上学が取り憑かれてきた同一性の原理に対抗して、ナンシーは特異性を保持する断片 (*fragments*) に重点を置く。同等なものとしてはくることができない特異な断片を思考することを課題とするのだ。このナンシーの思考は実存の特異性に向かう「断片の存在論」とも特徴付けられる。

以上のように外部性と断片の存在論をもとに、哲学を再び始めることがナンシーの意図するところである。

共存在の存在論、実存の領野の拡張 (pp.21-31)

ネイラが「根源化された実存主義」と呼ぶ所以は、ナンシーが実存を「自己の外にある存在」として示し、拡張したことにある。ナンシーはハイデガーの現存在を中心に据えた分析では共存在を十分に理解することができないという問題意識を持った。そこで、彼は現存在を主体の領野の彼方にある実存の領域をあらゆるものへと広げていく。ナンシーの共存在の分析は人と人だけでなく、総体としての存在を問題にするものとなる。

このような実存主義の拡張は実存と自由の問題で明瞭に現れている。例えば、『自由の経験』(1988)において、ナンシーは存在そのものが自由であるとす。自由を人間の特権とせず、全ての存在者に属しうものとして拡張する。サルトルは自由を到達不可能なものとし、本質に先立つ本質として措定した。これに対し、ナンシーは自由を基礎づけの問題から切り離し、事実 (*un fait*) に引きつける。自由は存在者を横断して、特異化の運動の中に

運んでいき、存在者を具現化する存在の運動としての事実であり、そうであるほかない。

自由の問題は無との関係からも論じられる。サルトルにとって人間の否定性により無が世界に向けられるのであり、人間主体は質料やその循環の外に位置づけられる。これに対して、ナンシーにとって、質料は無によって世界を作り出すようなものとして考えられる。この無は絶対 (*un absolu*) である。この無はどこにも位置することはないが、世界の全くの外部として到達不可能であるわけでもなく、存在の循環それ自体が無なのである。絶対的なものは解体するようになっている。だが、絶対的なものが消え去っても関係が持てないという関係は残るとナンシーはいう。それは関係がないという関係、切り離されているという関係なのである。

内在批判、関係性の過剰 (pp.31-37)

存在者に先立つ本質を想定することはないため、ナンシーの分析はすでに創造されたものの水準において本質の媒介を介さずになされなければならない。この問題に対して、ナンシーは間隔 (*l'écartement*) が先にあるという。間隔は何でもないもの (*rien*) であるが、しかし、この何でもないものから何かが起こる。クリナーメンのように、何を付け加えるわけでもないにも関わらず、空虚での原子の垂直な落下が出会いとなり、そこから世界や物体が生じるような断絶である。このアルチュセールの出会いの唯物論は、ナンシーにとっては特異性 (*singularité*) が無媒介に複数的でもあることを示している。このナンシーの思考は全てが内在にとどまるという理念を拒否し、始まりを外部に由来すると考える点で、スピノザ的な内在主義とは大きく異なる。このように内在主義への批判はナンシーの思考の大きなモチーフをなしている。内部には常に過剰があり、外部との関係を持たざるにはおれない。複数的でないものなど存在しないのだ。ナンシーは特異性が可能であるのはその特異性がそうであるところのものと、そうでないところのものとの隔たりによってであるとし、よってすでに常に複数性を孕んでいるとする。

3. 民主主義的政治の可能性

キリスト教の脱構築 (pp.37-44)

ナンシーは外部から付け加わる超越ではないようなかたちで「外部」を説明できるのかと問うていた。これは、神の問題系に絡め取られずに「外部」を問うにはどのようにしたらよいかという問題である。この問いに対してナンシーはキリスト教の脱構築によって応答しようとする。

キリスト教は自らを脱構築するような運動であった。ナンシーにとってキリスト教は内在主義の宗教だ。というのも、キリスト教の神はこの世界の内部に現れる限りでの神であり、キリスト教の神は通約できないような外部に位置付けられていたわけではないからだ。

このようなキリスト教に対して、ニーチェが宣言した「神の死」は2つの仕方ではたらいっている。ひとつは外部の全き消去である。これはニーチェが反動的ニヒリズムと名指したものにほかならない。これに対して、もうひとつのはたらき方はこの反動的ニヒリズムから出発することである。これまで見てきたように、内在主義は成立しない。全ては内部にあるが、同時にそこには過剰があり、その内部は外部に開かれているからだ。「神の死」は外部を消去した内在主義につながらず、新たな思考を要求するのである。

キリスト教が自ら解体することにより、外部が無限の全き外部として散種した。ナンシーはこの無限の通約できない外部に、本質としての機能ではなく、隔たりとしての意味を与えなければならないとする。

政治、宗教、存在論 (pp.44-51)

では、キリスト教の脱構築と政治はどのようにつながるのか。ナンシーが問題にしてきたのは、政治、存在論と宗教の分かちがたい結び付きである。1980年代のラクー・ラバルトとの共著、1991年までのクリストフ・バイイとの共著でナンシーが扱ってきたのは、原一政治であった。政治 (*la politique*) の本質としての「政治的なもの」 (*le politique*)、つまり政治のアルケーを彼らは探っていた。それゆえ、彼らにとって「政治的なもの」と「存在論的なもの」の見分けがたさが問題だった。

だが、「政治的なもの」と「存在論的なもの」が見分けがたいにもかかわらず、政治のアルケーを探っている、両者を宗教的な束縛から解放するこ

とができないのではないか。「政治的なもの」と「存在論的なもの」に執拗に残る「主体の形而上学」から解放されるには、両者を結び付ける一体性を瓦解させる必要がある。主体の形而上学との強い結びつきから解放されるために、ナンシーは政治と存在論の一体性を解体しなければならなかった。

だが、2000年代の終わりにはナンシーの意識は変わってきている。というのも、存在論が拡張されるとともに、キリスト教の脱構築がなされたために、政治がそれ自体問うべき主題として現れるようになったからだ。

ネイラは以上のナンシーの議論を総括し、浮かび上がる課題を次のように提示する。異質性を解消しないような概念として政治を提示するという試みを受け継ぐこと、そしていかにすれば政治が内在主義に対立するようになるのかを描き出すこと。

原一経済 (pp.51-56)

キリスト教が解体した後の現代において、内在主義は今日、別の名前を持っている。それが「等価性」である。等価性は特異性を認めず、全てが通約できるとするものだ。『フクシマのあとで—破局・技術・民主主義』(2012)でナンシーは貨幣と技術の等価性について分析している。

技術と自然はそもそも区別できないものであり、連続している。しかも、現代においては技術と経済はグローバルな規模で分かちがたく結びついている。このような技術、自然、経済の連関の中で、等価性にどのような本質があるのかどうかの問題となる。このエコ・テクネーの内在主義は一体どのようなものなのか。

この問いに対して、ナンシーは等価性の原理を原一経済とつなげる。ナンシーによると、マルクスが発見した一般等価性の原理はエコノミー(経済)の根源であり、そのグローバル化に伴って、この等価性はグローバルに行き渡っており、技術の領域にも浸透している。

この等価性による経済、技術、自然の絡み合いは、それ自体として災厄として現れる。例えば、福島原子力発電所の事故はそれ自体としては特異な出来事ではなくなっている。別の場所で起きた事故である場合であっても、その災厄としての性質は変わらないだろう。福島で起きようが、別の場所であろうが、事故は等価なものとして現れる。このように等価性の原理がグローバルに行き渡り、災厄の特異性が思考できなくなっていること、これ自体が災厄なのだと言ナンシーは述べる。

このような状況で再帰的近代に賭けるベックと違い、ナンシーは新しい非再帰性、ラディカルな非等価性に向かおうとする。通約できないもの、同じ基準で測りえないものにいかにか余地を残すのが問題なのである。内在主義の「等価性」に対して、ナンシーはこの通約できないものに基づいて (sur) / よって (par) 開かれる「平等性」を基礎づけることを目指している。

「実存主義的コミニズム」 (pp.56-72)

「原—政治」の問題系から「原—経済」の問題系へと移ったことにより、ナンシーは「ひとつの政治」 (*une politique*) について考えることができるようになった。政治の本質 (*le politique*) でもなく、既に規定されている政治 (*la politique*) でもなく、今そこに起きる予測できない出来事に余地を残しておくようなひとつの政治。そこで問題となるのは、「民主主義」である。

ナンシーにとって民主主義とは「政治」の用語ではない。民主主義とは政治において政治的ではないものに正当な権利を認めるものに付けられた名である。民主主義は社会契約などの議論で人間と人間との契約として考えられてきた。だが、ナンシーにとって民主主義はただ人間同士の関係を表すだけではない。それにより政治と政治的でないものの隔たりが可能になるもの、それが民主主義である。政治が、民族や共和国、人間などのアイデンティティに還元されることなどないことを民主主義は示す。ゆえに、民主主義的政治はひとつの形象 (*figures*) を取ることなく、むしろ様々な政治のかたちが増殖していくことを認める政治である。

この民主主義観は彼のコミニズムにつながっている。コミニズムとは政治制度でも、目指すべき政治的理念でもなく、実存の事実なのだ。それは共にあるという実存の所与である。民主主義の内実は事実としての実存主義的コミニズムそのものである。

改めてナンシーの政治とは何であるのか。それは、政治の内部でその外部へ開けることを可能にすることである。政治を何らかの内在性に結びつけることなく、政治的意思の発露としての断絶の瞬間を基礎付けること。政治をその内在性において捉えるのではなく、その外部への開けを認識してさらに一歩進めること。これがナンシーの政治への態度である。

4. おわりに

本書は小著ながら、ナンシーの基本的な思考をなぞって浮かび上がらせており、1980年代から2000年代後半までの政治的思索の軌跡を描き出している。政治的実践は何らかの特権的な主体なしに考えられてこなかったが、この主体の形而上学を脱構築した後にはいかなる政治論を言葉にしていけばいいのか。存在論と政治の困難な関係についての格闘から「実存主義的コミュニティ」は提起された。だが、ナンシーの提起は提起でしかない。その提起を引き受けていかなる思考ができるかが問題なのである。本書でネイラがナンシーを論じたのも、この提起を真摯に受け止めてのことであろう。

ネイラはナンシーを読解するにあたって、現代の政治思想、例えばランシエール、バディウなどと一線を画そうとし、また思弁的実在論や新しい唯物論といわれる諸潮流に対決する姿勢を示している。この対決の裏に横たわる論点は「実践」と「主体性」であるだろう。主体は脱構築された、がその上で探られるのは「別の仕方での」「実践」と「主体性」なのである。

本書で直接にガタリに言及することはないが、ネイラのナンシー読解の視点はガタリのエコゾフィーを大きな土台にしていることは明白に読み取れる。いわば、ネイラの試みは、人間主体を特権化せず存在論と政治を拡張する「実存主義的コミュニティ」を生態学的問題設定に接続し明確化することで、ガタリが提起した実践的エコゾフィーとエコゾフィー的実践への一つの展望を開こうとするものである。

本書の立場を敷衍すれば、共生とは単なる事実だ。すべてが共生している。むしろ共生の実践とは何か、という問いを存在論から実践論まで横断して論じねばならない。本書はその探求を誘発してくれるだろう。

注

(1) Neyrat 2014 と Neyrat 2016 を参照。

参考文献

Guattari, Félix 1989. *Les Trois Écologie*. Paris: Éditions Galilée.

Nancy, Jean-Luc 1988 (2000). *L'expérience de la liberté*. Paris: Galilée. (『自由の経験』
澤田直訳、未来社)

————— 2012 (2012). *L'équivalence des catastrophes (Apès Fukushima)*. Paris: Galilée.
(『フクシマの後で—破局・技術・民主主義』渡名喜庸哲訳、以文社)

Neyrat, Frédéric 2014. *Atopies. Manifeste pour la philosophie*. Caen: Éditions Nous.

————— 2016. *La part inconstructible de la Terre. Critique du géo-constructivisme*.
Caen: Éditions du Seuil.